

## 69 GnRH agonist 使用下の体外受精プログラムにおける妊娠を示唆する重要因子の選択

河内総合病院, 関西医科大学\*

森本義晴, 堀越順彦\*, 桑名博士, 牧野 滋,  
森本武晴, 榎木 晋\*, 榎木 勇\*

〔目的〕 GnRH-agonist を用いて, 内因性ゴナドトロピン抑制下に過排卵刺激を行ない, 諸因子のうちいずれが妊娠成功の指標になるかについて検討した。〔方法〕 Buserelin 900 $\mu$ g/day を前周期の21日目(25周期), または実施周期の1日目より(17周期)投与した。月経周期3日目よりHGMを投与し, HCG10000 iu 投与後34時間後に採卵した。採卵日をDay 0とし, Day -4よりDay +5までの血中LH, Estradiol (E2), Progesterone (P4)を測定した。次に, 合計42周期を妊娠周期群(P群, 6周期), 非妊娠周期で受精率50%以上の群(H群, 11周期), 非妊娠周期で受精率50%未満の群(L群, 25周期)に分けて比較した。〔成績〕 Long, Short いずれのprotocolでも premature LH surge とと思われるものはなく, LHは低値であった。また, P群は全て Long protocolに含まれた。HMG投与総量では, H群がL群に対して高値を示したが, P群における使用量が最も少なかった。卵胞数では, H群がL群に比べて多かった。E2では, Day-2でP群(3328 $\pm$ 2269 pg/ml)がH群(2241 $\pm$ 1217 pg/ml), L群(2300 $\pm$ 870 pg/ml)に対し有意に高値を示した。Day-1でも同様の傾向であったが, Day+1では差はなかった。次に, 一卵胞当たりのE2についても検討したが有意差は認められなかった。さらに, P4については, Day-2(HCG投与前)からDay+1までの値は3群間で差はなく, Day+3においてP群(79.0 $\pm$ 35.9 ng/ml)はH群(58.53 $\pm$ 21.9 ng/ml)より有意に高かった。〔結論〕 ①いずれの方法でも Buserelinにより, 内因性LHは抑制されたが, 妊娠例は全て Long protocol であった。②E2では, Day-2の値が最も重要で, 妊娠成功の指標になる。③P4では, 採卵前の値よりDay+3の値が, 妊娠に影響する。

## 70 男性因子不妊症治療における Zona Opening 法の有効性について

スズキ病院

小田原 靖, 千田 智, 飯田修一, 森 滋,  
鈴木雅洲

〔目的〕 IVF-ET は男性因子不妊治療に広く行われている。しかしその受精率は他因子患者に比べ低率であり妊娠率も満足すべきものではない。我々はIVF-ETにおける男性因子患者の受精を補助する方法として Zona Opening法を独自に開発しヒトIVF-ETでの受精に対する本法の影響について検討した。〔方法〕 前回までのIVF-ETで受精率が0%であった高度乏精子症, 精子減少症患者のうち同意が得られた症例に対して IVF-ET で得られた卵子の一部を本法に供し, 48個は採卵当日(Day 0)に, 28個は翌日(Day 1)に Zona Openingを施行し受精の有無を検討し, 更に精子濃度, 精子運動率, 媒精後の透明帯精子接着, 卵胞腔内精子侵入と本法による受精成立との関連について検討した。

〔成績〕 正常受精率, 多精子受精率はDay 0 Control 18.6%, 0.0%, Zona Opening 27.0%, 7.7%, Day 1 Control 0.0%, 0.0%, Zona Opening 21.4%, 33.3%と共に Zona Openingで高値であった。Zona Openingによる受精群, 非受精群で精子濃度, 運動率に差は認めず透明帯付着精子数, 卵胞腔精子数は受精群で27.9, 6.8, 非受精群で6.6, 1.3と受精群と共に高値であった。〔結論〕 本法は高度男性因子不妊IVFでの受精率向上に有効であるが通常精液検査ではその効果は推測できず透明帯精子接着等の機能的検査の必要性が示唆された。